

動物園

B - 2 0 関 千寿花

目次

序論

第一章 動物園の現状

- (1) 日本の動物園の成立
- (2) 動物園関連の法律

第二章 動物園の役割

- (1) 自然保護・種の保存
- (2) 教育的要素
- (3) 動物研究

第三章 動物園の存在意義

- (1) 動物園廃止論者の意見から考える
- (2) まとめ

最後に

謝辞

参考文献

序論

私がこのテーマを思いついたのは、動物園が好きであったからに他ならない。大学 1 回生の短い間に動物園に 4 回行った。神戸にある王子動物園、東京の上野動物園、大阪にある天王寺動物園、そして京都市立動物園。動物園という存在に疑問を感じ始めたのは、天王寺動物園と一緒にいった友人が「動物って嫌いじゃないけど、動物園の動物ってみんな精神病みたいだから来るのやなんだよね」と言ったことからである。

動物が動物園で野生本来の姿で暮らしていないことはわかる。トラやライオンが檻の中で行ったり来たりしているのは、本当に精神病のようにはか感じられない。しかし、動物を精神病にして楽しんでいるわけではない、動物に窮屈な生活をさせて楽しんでいるわけでもないと思いたかった。何故、動物園が存在するのであろう。動物園の存在意義とは何なのか。ただ動物園が好きだからといって、私はこのまま何の疑問も抱かずに、今後何度も動物園に足を運んでいいのであろうか、そんな気持ちが今回テーマを設定するに至った。

第一章 動物園の現状

動物園は人生で 4 回は行く。最初はこどもの時、親に手を連れられて。2 度目はカップルで、そして自分が親になった時。最後は年老いた時、散歩がてら動物に癒されに行く。…という話は聞いたことがあるだろうか？ 普段は娯楽としての役割しか気付かないように思うが、動物園とは本当はどのような存在なのであろうか。

動物園 どうぶつえん zoo || zoological garden

動物園とは動物を収集飼育し一般に公開している施設であるが、日本では現在、博物館の一種とされる社会教育施設である。したがって博物館法で規定される趣旨に沿って運営されている。すなわち資料（生きた動物）を収集し保管し（飼育管理）、展示して教育的配慮のもとに一般公衆の利用に供し、その教養、調査研究、レクリエーションなどに資するために必要な事業を行い、あわせてこれらの資料に関連する調査研究を目的としている。同じ趣旨で国際博物館会議（ICOM）も動物園を博物館の一つのタイプと認めている。これは今日の姿であるが、動物園の歴史は必ずしも平たんなものではなく、いくつかの段階があったことを示している。（平凡社、百科辞典より引用）

（1）日本の動物園の成立

初めて日本人が動物園を見たのは 1862 年（文久 2 年）の遣欧使節である。当時の日記が様々な人によって書かれているが、その日記の中には<動物園>という言葉は見つけれず、野獣園、などといった表記のされ方であった（動物園という概念が存在していないので、各々表している言葉は様々であった）。初めて<動物園>という言葉が出てくるのは、随行した福沢諭吉が 1866 年に出版した『西洋事情』である。この後すぐに<動物園>という言葉が大衆に広まったわけではないが、動物園を日本で実現しようとする人の中では定着されつつあった。

この書物で福沢が紹介したのは、議会制・税制・郵便などの諸制度を始め、蒸気機関・電信・新聞などの利器、痴児院（精薄児施設）・老院・啞院・盲院などである。それらと並んで<博物館>が紹介され、その一つの施設として初めて<動物園>という言葉が出てく

る。近代文明を取り入れるために行われた遣欧使節であるが、動物園もその一環として受け止められたようである。そのため、日本における動物園は博物館を構成する一部として創設する方針であった。日本における動物園設立に関しての構想は三つ描かれていた。一つは福沢諭吉が紹介した自然史博物館の構想で、この中に動物園の創設が含まれている。これは、現在の大英博物館のようなもので、当時の日本にはまだ自然史博物館に興味を持ち、意義を見出す人は少なかったようである。そのため、自然史博物館は実現されなかった。二つ目は文化財博物館としての構想で、現在の東京国立博物館のよって象徴されるような博物館のようなものである。その中に動物園のようなものの創設が含まれている。動物を文化財として捉えていた面は、博覧会などにも動物（生き物）が展示されていたことを考えると理解できる。三つ目は日本に資本主義を樹立するために役立つと考えられていた、産業博物館あるいは技術博物館の構想である。遣欧使節の目的がそうであったように、最終的にはこの構想が強まり実現することになる。

（２）動物園関連の法律

以下は戦後に日本で施行された動物関係の主な法律である。太字は特に重要なものだが、これらは動物に関する法律であって、動物園の指揮・運用の規程まで定めてはいない。動物園は成立過程から考えても博物館様施設なので、博物館法という法律によって動物園という施設運用は定められている。しかし、いわゆる博物館やレジャー施設と異なった存在であるはずの動物園も一緒に規定しているので、結局動物園は曖昧な位置付けなようである。

- 1973 年「動物の保護及び管理に関する法律」制定
- 1975 年「犬及びねこの飼養及び保管に関する基準」（総理府告示）
- 1976 年「**展示動物の飼養及び保管に関する基準**」（総理府告示）
- 1980 年「**実験動物の飼養及び保管等に関する基準**」（総理府告示）
- 1987 年「**産業動物の飼養及び保管に関する基準**」（総理府告示）
- 1999 年「動物の愛護及び管理に関する法律」に改正（2001 年より環境省所轄）
- 2000 年「動物取扱業者に係る飼養施設の構造及び動物の管理の方法等に関する基準」（政令）
- 2000 年「人の生命、身体又は財産に害を加えるおそれがある動物の指定」（政令）
- 2002 年「**家庭動物の飼養及び保管に関する基準**」
- 2004 年「**展示動物の飼養及び保管に関する基準**」改正
以下、実験動物、産業動物も改正へ
- 2005 年「動物の愛護及び管理に関する法律」改正へ

世界の動物園については詳しく調べていないが、動物園法という動物園独自の法律を定めている国もある。しかし、日本には動物園法がないので、動物園という名称を使用する際の制限もない。今回の研究で対象にしたのは、法律で「展示動物」と称されている動物のほとんどが生活している「動物園」についてである。北海道の熊牧場も動物園に入るかもしれないが、どういう趣旨で熊を飼育しているのかを理解しない限り、どういった「動物」に入るのか決められないので、どの法律で規定されるべき「動物」かも決められない。よって今私があえて「動物園」とは法的にどのようなものかを定義して研究を進める必要

はないと感じる。法的に中途半端な存在である「動物園」が、人々にどの様に受け入れられているのか、どんな役割を期待されているのかを考えるのが今回の目的である。

現在、動物園関連の法律は主に環境省の管轄である。しかし、これらの法律は規定の大枠しか設定していないため、各都道府県の裁量の余地が大きくなっている。動物園の園長になるのは各都道府県の教職員になる必要があり、動物を飼育する際に適当とするケージの大きさなども各都道府県によって異なる。動物園に対する環境エンリッチメントの評価など、世論によって条例を変えてきた都道府県もあり、日本の動物園を一様に考えるには無理がある。このように、動物園という言葉が動物園の役割を満たしていなくても使用できること、環境エンリッチメントの基準が都道府県によって異なることなどから、一概に日本の動物園を評価するのは難しい。そのため、動物園を法的にではなく、社会に必要な存在としての位置付けを理解して行きたいと考えている。

「動物園を見ればその国の文化程度がわかる」ともいわれるように、動物園はヒトの暮らしの中で最も文化的な象徴であるとも考えられる。今回は、日本の動物園を調べるに留まったが、世界の動物園を考えると、期待されている役割、法的な基準などは様々である。社会から求められている動物園の役割が定まってから、法的な基準を定めた国が多いので、日本はまだ動物園の役割が流動的なために法律を定めるには至っていないのかもしれないと考える。世界の流れから、日本の動物園のエンリッチメントなどが問題になっているが、日本は日本なりの動物園の役割を見出せばよい。日本の文化と日本人的な考えがエンリッチメントにも、一般に世界で言われている動物園の役割にもマッチしていけばよい。そう考えると、世界に対して日本の動物園が十分に独自の意見を表明できることを願って、日本に動物園法が作られてほしい。

動物園は生活に余裕のある国にしか存在しないと思っているのは偏見だったようである。動物園を調べていくうちに、動物園は単なるレジャー施設ではないのだという意識を世界中の人々が持っていることに気付いた。動物園よりも経営の簡単なレジャー施設は相当あると思う。それでも国が動物園を作りたがる理由は、博物館的な要素を兼ね備えているからであり、それでも人々が動物園に行きたがる理由は、ヒトと動物とのかかわりから始まって宗教観・倫理感に行き着く様々な文化的な背景が存在するからなのであろう。先にも書いたが、その国なりの動物園の存在意義があるのは当たり前のことであり、内容によっては他の国が口出しをしてはいけないことを含んでいるのかもしれないと感じる。日本の動物園を考える上では、日本で生まれて生きてきた私の偏見がおそらく入っているであろう。しかし、その側面があることで、動物園が日本に存在する意義が見出せるような気がする。日本に動物園が誕生して発展してきた。さらに日本の動物園の発展を願うとき、日本の歴史と日本人の価値観が深く関わってくるのではないだろうか。この文を読み進めて、それを知っていただけたら幸いである。

第二章 動物園の役割

動物園に求められている役割は成立当初から現代にいたるまで普遍的なものではないであろう。しかし、日本では動物園が博物館の一部という構成のもとに成立したので、教育的要素、動物研究という趣旨が最初から存在していたように思う。動物園の存在意義が議論され始めた 1980 年代では社会に求められている役割は、レクリエーション、教育的要素、自然保護（種の保存）、動物研究の 4 つであった。しかし最近では、1980 年に国連機関である IUCN（世界自然保護連合）が「世界環境保全戦略」の中で「動物園や水族館は、種の保存、遺伝子の多様性の保存、また環境学習の面で貢献できる」と述べたことにより、動物園の目的は教育的要素と自然保護（種の保存）がメインであると意識されるようになった。世界的な背景に沿うように、日本では動物園の役割が求められているのであろうか。また、日本の動物園はその役割を担おうとしているのであろうか。

（1）教育的要素

教育的要素では看板や展示の方法が主な表現である。まずは展示の方法について紹介する。展示方法は、「生態的展示」が最近の主流になってきている。これは、動物の本来の姿をいかに展示しようか、という考えから生まれた展示方法であり、野生動物の本来の生息地における環境と生活を作り出すことが目的である。つまり、サンプルとしての「種」ではなく、自然環境とのつながりを持った「個体」として展示する方法である。自然環境や野生動物に関して何を伝えたいか（教育したいか）といったら個体と環境のかかわりであった、つまりエンリッチメントを重視した展示方法を取らざるを得なかったということなのである。環境エンリッチメントとは、展示動物がより快適に暮らせるように配慮した施設のことであり、動物愛護で動物の権利が侵害されていると言われるのは環境エンリッチメントの低さである。教育的要素を突き詰めた結果、動物本来の姿を説明し理解してもらうために、動物 1 個体のための展示を行う必然性に迫られたとも言えよう。

さて、もう一つは看板に関して。看板は動物の属名や生息地が一般に表示されているが、それだけではない。動物をよりよく知ってもらうために、メイティングシーズンはいつですとか、だからこの季節のオスは凶暴なので注意しましょうとか、細かいけど記憶に留まるような方法を取った多くの看板がある。今年の夏にラオスの動物園を見る機会を得た。ラオスの動物園について、一番驚いた看板について言及しようと思う。まず、普通なら（日本では）属名や生息地まで書いてある看板が“TURTOL”とだけ書かれていたことである。そのときはこれが教育的要素を担っているのかと思ったが、今思い返せばそれがラオスなりの教育なのかも知れないと思うのである。まだまだ高校まで通える人が少なく、識字率も都市部では高いが少し離れると激減すると聞く。外国人向けのお土産ショップにいる英語ぺらぺらの店員さんが、14\$ の買い物をして 20\$ 出したときのおつりの計算を、電卓を使ってやっていた。日本ではいくらバカが増えていると言っても、義務教育中にそれくらいはできるようになるだろう。そう、だから動物園の教育もラオスの教育事情と十分マッチしたものなのかも知れないと思えてきたのだ。動物園に展示されていたって、鹿は「シカ」と説明された。アルビノではない白い種類のサルをアルビノと展示しており、本当に教育か？とも思ったのだが、始めて日本以外の動物園を見る機会であったので、そして少しはラオスの生活を理解し始めた時期だったので、これほど深く動物園に関して考えられたことが嬉しかった。普段看板はあまり気にしない存在である。しかし、動物の外

見でわかる「カメ」以外に情報がないとは、なんてつまらないものなのかと感じた。私たちは無意識に教育という名の情報を求めに動物園に行っている事実もあると気付いた。

さらに、教育的要素は観客と動物のふれあいなしでは図れないものであるようだ。日本は文化的にも親切であり、危険な動物との接触はほとんどと言っていいほど回避されている。触れあえるといっても、昔日常的に触れ合っていた畜産動物の類だけである。しかし、ラオスの動物園は観客と動物との交流が十分に図られていた。例えば、シカにきゅうりをあげられたり、ゾウに乗れたりする。そしてほとんどがあみ柵を隔てて動物と観客が直に直面する。手を出せば間違いなく噛み付かれる位置。危険は自分で回避しなさいというのならアメリカに近いが、単に飼育係や動物園の経営者にそこまでの知識がないのかとも感じられる。それはともかく、シカの三角筋か僧帽筋かの首の筋力は私の両手でも勝てないくらい強いとわかったし、ゾウの体毛はジーンズを通すぐらいしっかりしていて痛いということも実感できた。こんな実体験、どうやって忘れよう？他にどうやって得られるものだろう？動物と直にふれあえることがこれほど教育に必要と感じたこともなかった。

このように、教育的な要素は無意識に観客が求めているものであり、日本の動物園もそれに答えるべく、展示方法の改善を行ったり情報を充実させたりしている。動物の環境エンリッチメントを考えた展示は強いては動物への正しい理解につながり、動物とのふれあいはおそらく動物との共存の小さな理想像なのかもしれない。これらのことを通して私は、動物園の教育的要素は非常に大きいと理解した。

(2) 自然保護・種の保存

ワシントン条約(絶滅の危機に瀕した野生動植物の国際取引に関する条約)では、今飼っている動物が死んだ時、次の動物を野生から持ってくることは禁止されている。他にも様々な野性動物の保護を目的とした条約がある。このようなことから、種の保存と言うのは、動物園の存続にとって重要な位置を占めている。

動物園での種の保存はおそらく、絶滅危惧種を増やして野生に放すなどといった行為を指すのではないと考える。動物園の動物保護活動は環境保護区やサファリパークなどと比較すると、あまり求められていないのではないかと思うからである。動物園と環境保護区、サファリパークはまた違ったものではないかという思いがあるのだが、どのような規程が敷かれているのかは定かではない。動物園で、啓蒙ではなく実際に自然保護をしようというのは、やはり動物園の敷地が狭い日本には導入できない考え方ではないだろうか。しかし、日本では全国の動物園にいる各動物の親子関係を必ず把握している(戸籍のようなもの)。なぜなら、狭い動物園内の個体間では近親相姦の生じる恐れがあるからだ。世界ではパンダなど動物園の個体数が限られている動物に限り行われているが、日本以外では絶滅危惧種や動物園での繁殖が期待されている動物に関してしか行われていない。それは、展示している動物が野生で傷ついていたといったような保護を必要としている動物を飼育しているという現状もあるようなのだが、このような戸籍制度は繁殖を考えると非常に有効なのではないだろうか。これらの話は、日本が世界の流れをふまえながら、日本なりに動物園の役割を考え出そうとしている現れであると考えられる。動物園は身近なところであるにも関わらず、動物園について考えることはあまりない。これも日本人の傾向なのかも知れないが、是非今後、日本なりに動物園の役割が議論され始めてほしい。

動物園生まれ、動物園育ちが増えてきた時代だが、本当に動物本来の行動を身に付けているのであろうか。動物園のゴリラが、勢力争いをしなくて済むためメスに乱暴にあたっ

ていたのだが、もう一匹のオスを群れに入れたとたん、急にメスに親切になった、という多摩動物園のエピソードをどう感じるだろうか。種の保存と言っても、動物園という限られた個体数の中では、本来の動物が兼ね備えている気質や生活を発揮していないと思える。DNA だけ続いたからといって種の保存とは言えないから、動物の種を動物園で守り続けようと意気込まなくてもいいと思わずにはいられない。根本的な問題はやはり、教育をして実際の野性動物の生活環境がこれ以上犯されないように守っていけばいいのではないだろうか。動物園が展示できる動物はこれ以上野生から連れてくることはできない。そのためにサンプルとして種を保存しようとするのは確かに必要である。しかし、動物園の動物と野生の動物はやはり違うのではないかと感じる。

(3) 動物研究

私は以前自分の研究志望の動機・今後の見通しを想像したことがある。それは、以下のような感想になった。

私の好きなアーティストの歌に次のような歌詞がある。

夢、夢って あたかもそれが素晴らしい物のように

あたかもそれが輝かしい物のように 僕らはただ賛美してきたけれど

実際のところどうなんだろう？

何十万人もの命を一瞬で奪い去った核爆弾や細菌兵器

あれだって最初は 名もない化学者の純粋で小さな夢からはじまっているんじゃないだろうか

そして今また僕らは 僕らだけの幸福の為に

科学を武器に 生物の命までをもコントロールしようとしている

(Mr.Children : Everything is made from a dream より)

私の夢は研究者になることである。脳や神経について研究がしたい。それは、人体という小宇宙を司る脳や神経がどのような機構であるのかをただ知りたいからである。ただ、今のところは、単なる興味から解明したいだけであり、社会にどう応用していくかにはほとんど関心がない。それと同時に、どう社会に応用されていくかわからない不安がある。解明したい興味と負の方向への応用に対する不安が私にとりついて離れない。

大学は元来研究する施設である。教育という概念が誕生したのは研究成果が悪用され始めたからであろう。歴史とともに科学が進歩し、古い例を出すならば、最初は騎馬隊だった戦いが鉄砲による戦いになる。その発展は良い方向への進歩といえるのだろうか。戦いに死はつきものだが、鉄砲を用いることでより多くの死者が出る。それは核爆弾が発明されたときも同じで、科学の進歩に犠牲がつくことがしばしばあった。人がいる以上必ず興味があり、科学が進歩するのは避けられないが、応用の仕方が問題なのであろう。その問題を解決するために教育という概念が誕生したのではないだろうか。

教育は技術だけを専門性だけを学ばよいわけではない。研究者か否かに拘らず何か解明され、その事実が自分の職や専門にかかわるときに、それをどう応用していくかはその人次第である。そのとき誤った選択をしないよう、大学で正しい価値基準を身につける、これこそが教育の真の目的ではないだろうか。特に専門性の高い医学部という環境には、同じ考えや視点を持つ人が多いから、専門以外の勉強は本当に大切だと思う。

最近医の倫理を問われることが多くなった。医学はまさに生物の命までをもコントロールしようとしているからである。医学の進歩が難病の治療につながるから良いと単純に考えるわけにはいかないだろう。病気がすべて治る時代になったら、病気や障害を差別する偏見が同時に生まれる。だからとい

って医学は進歩するし、進歩によって負の方向にも正の方向にも社会への応用は広がる。常に答えのない選択肢をつきつけられて考え続けながら、それでも流れる方向に進んで歴史は動いてきたけれど、その中で生きていた人がひとりひとりよい行動をとれば流れは少しでもよい方向に行くのではないか。そのために、やはり幅広い視点が必要で、答えが出なくても一生その問題を考え続けられる人間性を養うために学ぶことは必要である。すべての分野に知的好奇心を持つのは難しいと思うが、自分が選んだ専門をよりよく発揮するために、社会が負の方向へ進むのを止める小さな力となるために、勉学も課外活動も精一杯励まなければならないと思う。

私は研究者になりたいが不安もある。本当に興味だけで行ってよいのだろうか。例えば寿命の機構が完全に解明されたら、人はみな生き続けるのだろうか。死ぬことなく生き続け、そこに本当に人生の楽しみを見出せるのだろうか。期限があればこそ与えられた期間が素晴らしく思える。そういうものだと思えてならない。

研究の対象になること、それが社会で応用されることは最初の好奇心からでは想像がつかないほど奥が深いものである。研究者の知識欲は正当化されなければ発展・持続してはいけないと思うのだが、それで知識欲が抑制できるかと言うとそうでもない。動物園も然り、ヒトにある動物への好奇心を満たせる場としてはやはり「動物園」しかないのではないかと思う。博物館もヒトの知識欲の集大成のようなものである。博物館としての動物園をもっとアピールしても良いのではないのだろうか。おそらくその機能は教育的要素に含まれているのかも知れないが、やはり私は、教育的要素と研究機関を統合させた人間の心理が動物園の存在には深く関与しているのではないかと考える。

第三章 動物園の存在意義

今回参考にさせていただいた動物園に関与する団体を紹介する。

- ・ **日本動物園水族館協会**：1939年に当時19の園館によってつくられる。1965年には動物園55水族館33に達し同年11月22日付けで、文部省社会教育局（現在の生涯学習局）所管の社団法人として発足し、現在では動物園94水族館61が加盟している。協会に加盟するためには、4つの社会的使命（第二章参照）を果たしているかどうか厳しく審査され、尚かつ、加盟園館はこの基準を遵守し続けなければならない。
- ・ **市民 zoo ネットワーク**：2001年4月に設立したNPO(2004年4月からNPO法人)。目的は動物園を通じて人間と動物の関係を見直す機会を提供し、人間と動物を取り巻く環境に対する意識を高めること。
- ・ **ALIVE (All Life In a Viable Environment (地球生物会議))**：野生動物、ペット、実験動物、動物園、畜産動物、生命操作などに対して活動している。目的は少しでも動物たちの犠牲を減らし無くしていくこと。全国動物園調査などを行い、動物園の改善もしくは廃止を呼びかけている。また、実験動物に関しても動物実験の禁止を主張している。

動物園の話では、「動物」という「生き物」を対象にするので、動物保護の話は宗教論に行き着いたり、環境保護と重なり合ったり、人間と動物のかかわりに着眼し始めたりと、様々な方向へ展開していく。宗教論にまで行き着いた、肉食主義者に動物を束縛するのは良くないと言われても、議論の空間が違って思うように思う。こんな中で、動物園だけに絞り話をするのは非常に困難であるが、動物園の動物が、動物園の果たすべき役割に必要な存在かどうか、それに関して妥当な扱いを受けているのかについて考えていく。

(1) 動物園廃止論者の意見から考える

動物園廃止はイコール動物の不当な拘束をやめるべきだということであった。「動物園が社会に求められている役割を果たそうとすれば、動物を拘束するのはヒトの勝手であり、どんな良い環境を動物園で展開しようとしても、野生状態から隔離されている限り、拘束でしかありえない。」これは動物園廃止論者の理由をまとめたものである。「動物園の目的は動物園でなくても（動物がいなくても）果たせる」とまで言い切っているところもあった。例えば、教育的要素は、現在発達しているTVの方がよっぽど適しているだろうという意見もあるようだ。サバンナなどの自然のままの状態に入り込んで情報を提供できるのだからという理由であった。TVに関しては情報操作という問題点もあり、一概に信じられない媒介のように感じるが、動物園で実際に生きている動物を見たとしたら、百聞は一見にしかずだと思わないだろうか？また、TVの見過ぎで現実と空想の区別がつかないこどもが増加しているようだが、そんな媒介を使って自然教育をしたところでどんな効果が得られるのであろうか？自分の世界とは関係ない箱の中の出来事になってしまうのではないかと思うのである。

さて、動物を拘束することの正当な理由なんて存在しないと思う。しかし、よく耳にする「(ヒトと動物をフェアに見て) 知性ある動物を拘束するのは良くない」といわれると少々癢に障る。何故かという、その視点はヒトと動物を本当のところフェアに見ていないからである。動物は他の動物を拘束などはしないであろうが、ヒトが他の動物を拘束する行為は、動物とヒトでは明らかに違う「好奇心」または「知識欲」という名のもとでの行為だと思ふからである。動物の権利を主張するのなら、同様に動物としてのヒトの権利を主

張しなくてはいけないのではないだろうか?ヒトらしさと言われる、「知識欲」をヒトから取り上げていいのだろうか。ヒトの権利を抑圧して、動物の権利に躍起になることは矛盾した行為である。ヒトは動物を苦しめようとして拘束しているのではないはずである。知識欲から、たんに動物を身近に置いて観察し学びたかったのではないかと感じる。

(2) まとめ

動物園は博物館の延長である。動物を知りたい、生きている動物でしかわからない何かを知りたい、という思いから動物を飼育し始めたのであろう。ヒトの知識欲、それは自然史博物館のようにヒトを取り巻くすべてのものに対して向けられている。ヒトは同じ仲間をも拘束して虐待することがある。同じ種なのに殺し合い、憎みあうことがある。しかし、動物園で誼譚したり、いがみあったりしているヒトはいない。それは、動物園という拘束する場を作りながらも、無意識にそこにいる動物を思いやり、エンリッチメントに気を配ろうとしているからである。そして、動物園を訪れたヒトは、ヒトと動物は同じ仲間であることに気付くのである。動物園で、ヒトを含めた「動物」を目の当たりにし、ヒトの振り見て我が振りを思い返すのである。動物を拘束していること、それよりもひどいことを同じ種に対して行ってきた歴史などが、ふと頭をよぎり、内省するのかもしれない。物理的な動物とヒトとの関係ではなく、動物園は生態系の一部、動物とヒトとの関係、自然とヒトとの関係を浮き彫りにしていると考えられる。

動物園で動物と向き合って、動物園の正当性を考えたり動物としてのヒトを考えたりする。その行為自体に意味がある気がする。感情論でしかない部分があるが、動物というヒトの知識の対象になった捕われの動物たち、だけどヒトは彼らを単なる捕われの「動物」としてではなく動物国の大使として（増井光子さんのことばより）扱うのだ。動物園とはその、動物を知りたい、動物界のヒトを知りたい、生態系の一部としてのヒトの存在を知りたい、という思いが集積した場なのではないかと思うのである。ヒトも動物の一種である。それにも関わらず、動物を檻に閉じ込める。ヒトなりの交流方法なのかもしれない。動物としてのヒトを、地球上にはヒトだけじゃないことを、動物園というモデルの生態系の中で確認したかったとも思える。科学技術に埋没して忘れかけている動物としてのヒトらしさを取り戻させてくれる場であるように感じる。

文明が発展してきて、ヒト自身も拘束されたことがたくさんある。遺伝子診断で知りたくもない情報を知ることができ、自分で選択しなければならぬ問題が山のように生じた。でもそれは、知識欲と社会への応用力でヒトにそれほどな不自由は感じさせずに来たと思う。動物がどんな思いをもっているのかわからないが、動物園に拘束されたからと言って即不自由につながるわけでもないように思う。動物園の存在が、ヒト社会の発展もつながり、いろんな生物と共存するこの一つの地球が良い方向に発展していく支えとなる。そんな思いを、動物園を通して願ってみてもいいのではないかと思うのである。私はヒトとして生きて行きたい。思い上がることなく、でも本来のヒトらしさを出して生きて行きたい。社会が動物園に何を求めているのかわからない。しかし少なくとも、動物を見てヒトが抱く感情は動物園の重要な役割であると思う。

最後に

動物園というテーマは思ったより難しいものであった。何故かという、動物園が存在する正当な理由を考えだすと、動物と人とのかかわり、宗教的な価値観、広くは環境保護の話にまで発展するからだ。私がそんなに大きな問題まで考えるに至ったのは、動物が好きだから、今後実験動物と深く関わっていくであろうという意識から、そうぞんざいに扱えないという想いがどこかにあったのだろうと思う。

今回の研究で明確にしたかったことは、動物園が存在するに当たっての正論である。動物園は近年、動物保護団体や環境保護団体から、猛反対を受けている。しかし、動物園が存在し続けた理由は、惰性なんかではないであろう。その意味を調べ切り、自分の中で決着をつけたかった。残念ながら、一般教養の一コマという限られた時間の中で、理解しきることは精力的にも物理的にも不可能であったため、中途半端な仕上がりにってしまった。しかし、この問題は今後も考え続けていこうと思う。文系の論文は明確な答えのないままに仕上げることを余儀なくされるもののようで、中途半端な結論としてまとめざるを得なかった私には煮え切らない感情があるが、これから医学系研究者になる私には非常に有意義な勉強であった。

謝辞

締め切りを遥かに過ぎていても、原稿の完成を温かく見守ってくださった平先生に感謝します。また、私の原稿を心待ちにし、叱咤激励してくださった早島先生、ご迷惑をおかけしました。

また、生物の教師という立場から、動物園について相談に乗ってくださった高校時代の恩師に大変感謝します。まとめきれない論文を意地でも仕上げようかという気にさせてくれたのは、彼と先に論文を書き上げた某友人のおかげだと思います。本当にありがとうございます。

参考文献

- 佐々木時雄著 『動物園の歴史（日本における動物園の成立）』（1987年）
東京都 - 東京都恩賜上野動物園編集 『上野動物園百年史』（1982年3月20日）
渡辺守雄 著部分 『動物園というメディア』（青弓社 2000年第一版）
マーク・ベコフ 藤原英司、辺見栄(訳)『動物の命は人間より軽いのか（世界最先端の動物保護思想）』（中央公論新社 2005年7月10日）
市民 ZOO ネットワーク 『いま動物園がおもしろい』（岩波ブックレット No.623 2004年5月7日）
増井光子著 『動物が好きだから』（どうぶつ社 2003年11月30日）
ALIVE 『動物園を問う』（ALIVE 資料集 No.3 1994年9月5日）
梅崎義人著 『動物保護運動の虚像』（成山堂書店 2004年4月8日）
<http://homepage3.nifty.com/zooedu/kanshinbunnya.htm>

【コメント】

2005年の夏に、評判の旭山動物園に行く機会を得た。関さんが、「日本の動物園も…展示方法の改善を行ったり情報を充実させたりしている」と述べている動物園の代表例だ。旭山へ行ったのはただの偶然だが、どうしても人間科学研究のことを思い出してしまう。動物園好きの関さんは、論争の的になっている動物園の存在意義や倫理の問題については悩み抜いた末明確な結論を出しかねておられたが、旭山を訪れたとしたらどのような感想を抱かれるであろうか。私はというと、旭山動物園の盛況を見ていると人が自然を理解するにはこのような装置が必要だ—動物園がなければ個々に飼育されている動物種の大半を知ることなく過ごすことになったであろうし、名前や映像ぐらいは知るにしても存在を体感することはできなかったであろう—ということを素朴に実感してしまっていた。少しは動物を閉じこめていることの痛みを感じるかなと思っていたが、シロクマのダイビングの前にそんな予想は吹き飛んでいて、怖いけど爽快というのは側にいた小学生たちと同じ思いであったろう。高度情報社会のなかで実感的に生きていくことを「動物化する」というのだが、動物園はヒトを動物化させてくれる空間であるかもしれない。

(平 英美)